

松本市山と自然博物館に収蔵されている植物標本の概要

松田貴子*・桜井智子*

1. 山と自然博物館および標本の概要

松本市山と自然博物館は、2007 年にリニューアルオープンした市立博物館である。前身となるアルプス山岳館は 1975 年に開館し、主にアルプス関連の山岳資料等の展示が行われていた。2007 年、老朽化したアルプス山岳館の施設を建て替えて、松本市山と自然博物館と名称を改めて開館した。本施設には地下に収蔵室が設置されており、松本市内の各施設に分散していた自然資料を集めて保管することとなった。現在、動物（ほ乳類や鳥類の剥製、昆虫など）、植物、鉱物などの資料が収蔵されている。

植物標本は市民から寄贈されたものを中心に約 36,000 点あり、主なデータ入力および整理が終了したため、概要をここに報告する。また松本市の合併に伴って、安曇村及び奈川村に保管されていた標本も本博物館に統合された。なお、植物の分類は長野県植物誌の分類体系に準じている。

2. 採集地別標本数

採集地は、基本的に西暦 2000 年時点の市町村で入力している。表 1 に採集地域ごとに標本数をまとめた。

採集地は長野県内がおよそ八割を占め、30,000 点以上にのぼる。長野県内では特に中信地区の松本平地域が他の地域と比較して群を抜いて数が多い。このうち、松本市は 5,574 点であった。その他、北海道から沖縄まで日本各地での採集標本があり、一部国外の産地も含む。

3. 年代別標本数

標本数をおよそ 50 年単位で整理したものを表 2 に示す。最も古い標本は、1884 ～ 1885 年に河野齡蔵氏が採集したもので 160 点ほどある。1900 年代に入り、長野県における植物調査が盛んになってきた時期のものも多い。また戦時中も含まれる。整理前の標本は、台紙に貼られておらず新聞に挟まれ

表 1 地域ごとの収蔵標本数

地 域		標本数
長野県	北信地方	2,674
	中信地方（大北地域）	3,684
	中信地方（松本平地域）	15,066
	中信地方（木曽地域）	1,443
	東信地方	4,718
	南信地方（諏訪地域）	1,433
	南信地方伊那地域	1,448
	県内不明	79
県外	北海道	660
	東北	366
	関東	1,146
	北陸・中部（長野県除く）	1,074
	近畿	308
	中国	26
	四国	93
	九州	1,340
国外	沖縄	404
	アメリカ合衆国、台湾、モンゴル、ロシア、南洋諸国	374
	産地不明	134
合計（地衣類、蘚苔類も一部含む）		36,470

表 2 年代別標本数

年代	標本数
1884-1899 年	298
1900-1949 年	15,111
1950-1999 年	17,828
2000-2012 年	1,777

た状態で保管されていたものが多数あり、その新聞の記事は戦況を知らせる内容もあった。なお、それらの新聞は博物館に別途保管されている。

4. 採集者別標本数

採集者は標本数 1 ～ 2 点という方も含めると、120 名余りにのぼるが、ここでは特に標本数が多く、本博物館の収蔵標本を特徴づける 5 氏について、年代順に概要を述べる。

①河野齡蔵（1865 ～ 1930 年）標本数 2,880 点

松本市出身。尋常小学校、農学校、高等学校等教諭を歴任。明治中期以降、長野県内の植物調査にお

* 松本市山と自然博物館（植物標本整理担当）
〒 390-0861 長野県松本市蟻ヶ崎 2455

いて中心人物であった矢澤米太郎に協力して、特に高山植物を多く採集した。高山植物の研究家としても知られる。河野氏の収蔵標本の多くは 1900 年代前半のもので、県内高山帯の採集品が多いが、北海道や樺太の標本も収められている。同氏の標本は松本市立博物館本館に長らく保管されていたものを改めて整理したものである。

また同時代、松本市出身の教師であり博物家でもあった犬塚時次郎氏の標本が 758 点ある。

②千野喜重郎（1875～1967 年）標本数 3,735 点

旧佐久郡望月町出身。小学校教諭を務める。同氏の標本は主に望月町を中心に、1920～1930 年代の地元東信での採集品が多くを占める。牧野富太郎氏が同定したと記載のある標本が数点ある。

③公保（武田）徳雄（1897～1985 年）標本数 3,564 点

松本市出身。高等学校教諭（生物）を務める。県内中信地方の標本が最も多いが、鹿児島高等農林学校（当時）に在籍していた時代があり、鹿児島、沖縄の採集品がある。また樺太での標本も作成されている。

④清沢晴親（1902～1990 年）標本数 18,046 点

松本市出身。県内小学校、中学校教諭を務める。清沢氏の標本は、本博物館の収蔵標本の中で最も数が多く、約半数を占める。県内全域の山地～高山帯で幅広く採集されている。年代は 1900 年代前半のものも含まれるが、1950～1980 年のものが最も多い。タデスミレなどの貴重な標本もある。同氏は昆虫の研究者として知られるが、哺乳類や鳥類、甲殻類など動物全般や植物にも造詣が深く博物学者であった。

⑤奥原弘人（1906～2001 年）標本数 373 点

旧奈川村出身。県内小学校、中学校教諭を務める。県内各地の植物調査に携わり、『長野県植物誌』の編纂委員長・顧問を務める。奥原氏の標本は、ほとんどが信州大学の標本庫に収蔵されている。本博物館で収蔵している標本は、旧奈川村の『奈川村自然学習館』に保管されていたもので、同館の閉館および松本市との合併という経過を経て、本博物館で保管することとなった。標本数は多くないが、安曇村、木曽地域などの採集品である。奥原氏が研究を進めていたアザミ類の標本も含まれる。

5. レッドリストの植物

収蔵標本には、環境省指定のレッドリストおよび長野県版レッドデータブック（維管束植物編）に記載された植物も含まれている。

この中には、すでに産地絶滅したと考えられる真田町烏帽子岳のタデスミレ、松本市三城や中山で採集されたフナバラソウ、松本市や旧穂高町等のタヌキマメなど、貴重なデータとなる標本もある。

しかし採集者の同定をそのまま入力している場合も多いため、改めて確認する必要がある。

6. 標本の保管および標本データについて

標本の多くは採集者の遺族から寄贈されたものである。受け取り後、未整理の標本についてはこれらを同定し、台紙に貼り、ラベルをつける作業を行い、同時進行でデータ入力を実施しデータベース化した。現在は分類に応じた棚の整理を進めている。これらの作業は松田行雄を中心に筆者らが行っている。シダ植物の同定には長野県環境保全研究所の大塚孝一氏の協力をいただいた。しかし時間の制約もあり、十分な同定ができていない標本も多く、専門家による正確な同定が求められる。

これらの標本は長野県の多様な植物相を時間的、空間的に裏付ける貴重なデータである。今後さらに松本市の財産として、利用者や研究者に活用されていくことが望まれる。標本の閲覧には事前に松本市山と自然博物館（電話 0263-38-0012）へ連絡し、相談していただく必要がある。

また標本がデータベース化されている価値も大きく、将来は県内各施設の標本データとリンクし、長野県全体の植物分布を網羅できるようなデータベースをつくっていくことが望まれる。



写真1 収蔵庫の植物標本棚のようす